

活動報告 2 特別研究員・客員研究員

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター 公開日: 2021-09-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15014/0000000371

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0
International License.



■ 藺田 郁「近代日本における大衆的な語り芸の生成と展開に関する研究—唄・踊り・芝居の結びつきを手がかりに」

本年度は前年度と同じ研究課題で研究活動を進め、主に浪花節の地域受容および浪花節芝居（節劇）の興行活動、源氏節女芝居の上演形態、活動人形の興行活動に関する調査研究を行った。ただし、コロナ禍による外出自粛により、予定していた現地調査が実施出来なかったため、可能な範囲で文献による資料調査を行ったほか、前年度までに収集した資料の整理分析を進め、その成果を発表した。以下、上記の各研究対象に関する研究活動を記す。

浪花節の地域受容に関する研究は、前年度に現地調査等で収集した高知県を中心とする資料の分析に基づいて考察を進め、その研究成果を論文として発表とした（下記「関連する執筆」を参照）。浪花節芝居（節劇）の興行活動については、関西を中心とした上演状況の網羅的調査を実施し、現在も継続中である。これらの調査から特に明治期から大正期の興行展開のおおまかな流れが明らかになりつつあり、演者の動向についても一定の成果を得ている。またその成果から浪花節芝居と関連するジャンルとして、俄芝居や音曲萬歳（浪曲漫才を含む）との関わりが見出された。次年度はこれらの関連性を通じて、上記の芸能も含めた広い範囲での興行活動を明らかにしたいと考えている。また、これまでの現地調査を通じて得られた成果を浪花節研究の論集において発表した（下記「関連する執筆」を参照）。

活動人形は、前年に続き国会図書館などでの新聞資料、その他文献調査による興行記録の調査を継続した。特に台湾・満州（いわゆる外地）での記録については、植民地で開催された博覧会への興行記録を確認することが出来き、広範な興行活動の新たな一面を明らかにすることができた。これらの資料分析に基づく

成果の一部として、植民地期での芸能・音楽活動をテーマとした国際会議において発表を行った（下記「関連する口頭発表」を参照）。これらの地域での興行については、国際会議等を通じて活動人形に限らず、研究課題と関連する大衆芸能についても調査すべき事項が少なからず見出されたため、コロナ禍状況を見据えつつ、現地調査を実施していく予定である。

源氏節はこれまで収集できた音源資料および文献資料に基づいて源氏節女芝居の上演形態の解明を進めた。これらの成果の一部は、論文として発表予定である（現在、投稿審査中）。また興行活動についてもこれまで調査出来ていなかった地域について新たな情報を収集することができた。

◆関連する執筆

- * 2020.9「浪花節の『民俗化』と人形芝居—西畑人形の節劇をめぐって」『浪花節の生成と展開—語り芸の動態史にむけて』せりか書房、第五章担当、pp.142-160。
- * 2020.12「大正期から昭和初期における浪花節の地域受容—多面化する興行—」、日本伝統音楽研究、第17号、日本伝統研究センター、pp.1-13。

◆関連する口頭発表

- * 2021.03.27 “Live performances in popular entertainments during the Japanese colonial period: Focusing on expositions in Taiwan, Korea, and Manchuria”, 2021 International Colloquium “Japanese Colonialism and Music in Taiwan and Korea”, (via Zoom)。

◆講義・講座

- * 2020.04-2021.03 日本伝統音楽演習 d I・II・III・IV
- * 2020.12.03 令和2年度第1回伝音セミナー「声真似・節真似を聴く」日本伝統音楽研究センター

◆資料・調査

- * 2021.03.11 国立国会図書館 活動人形に係わる資料調査

◆対外活動

- * 2020.04-2021.03 大阪音楽大学 非常勤助手
- * 2020.04-2021.03 大阪大学大学院文学研究科 特任研究員
- * 2020.04-2020.09 神戸大学 非常勤講師
- * 2020.09-2021.03 畿央大学 非常勤講師

出口 実紀「近世の雅楽譜にみる唱歌の系統に関する研究」

2020年度は、これまで扱ってきた近世の雅楽譜について、笛譜、箏・楽譜の唱歌および指孔譜を整理し、楽家、さらには楽譜を書写した楽人別に区分して考察をおこない、各楽家の記譜の特徴と唱歌の系統をさらに詳しく分析した。

その成果公開として、令和2年度後期オンライン伝音セミナー第4回において「雅楽譜と楽家」というタイトルで講座を実施した。セミナーでは、天王寺方楽家である岡家と東儀家の楽譜を中心にとり上げた。この両家は、天王寺方の中で龍笛、箏・楽譜を主業としていた家であり、近世の書写楽譜が多く残っている。そこで、この両家の楽譜から盤渉調《青波海》の譜を事例に、各家の譜の特徴を紹介した。

まず岡家の笛譜では、本家と分家、紅葉山楽家となった家筋を整理したうえで、6種類の笛譜をとり上げ、楽譜を著した（書写した）楽人の出自とどの家筋の系統であるか、そしてそれが楽譜の系統をみていく上で重要であることを述べたうえで考察を進めた。6種の笛譜を比較した結果、①「リ」という唱歌の表記に「利」、「里」という漢字で表記される譜があること、②指孔と音名を表記する楽譜に分けることができ、先ほどの「利」と表記する楽譜では音名表記が用いられていること、③旋律は同じであるものの同じ家の譜でも唱歌が異なる、といったことが明らかになった。特にこの唱歌の違いにおいては、本家筋で現行譜に近い唱歌、分家筋でありながら嫡流とみなされていた家筋では現行譜と異なる唱歌であったことが確認できた。

次に、東儀家の楽譜では、笛譜3種と箏・楽譜5種をとりあげて考察した。箏・楽譜では、現行譜とは違い指孔譜が大きく書かれ唱歌がその左に付される系統の楽譜がいくつかみられた。そして、岡家の譜と同様に「利」の表記を用いる点から、この表記は天王寺方の楽譜に共通してみられる特徴であることを指摘した。さらに、5種の箏・楽譜の中でも二通りの唱歌に分類することができ、比較の結果、この唱歌の違いは年代によるものではなく家筋によって異なっていたと

考えられる。以上のことから、箏・楽譜においては京都方、奈良方との比較をおこない、笛譜については中世から近世に至る記譜の変遷についても今後研究を進める予定である。

民俗芸能における研究活動では、今年度も岐阜県、和歌山県において祭礼の調査委員および調査員を務めた。しかし、新型コロナウイルスの影響により調査対象である祭礼自体が中止となり、聞き取り調査も実施が難しいといったケースが多く発生したため、今年度は、楽器を含む祭礼道具や舞台、資料等の調査を進め、次年度の調査および報告書執筆に向けての情報収集をおこなった。

◆関連する執筆

* 現場レポート「伝統芸能における継承の課題とマネジメント人材育成の方向性—大阪における雅楽を事例に—」『音楽芸術マネジメント』第12号（日本音楽芸術マネジメント学会、2020年）

* 「下ヶ流のネギ習俗」『岐阜県の祭り・行事』（岐阜県、2020年）

◆講義・講座等

* 大学院音楽研究科：日本伝統音楽演習 eⅠ・eⅢ、eⅡ・eⅣ

* 2021.01.07 令和2年度後期オンライン伝音セミナー第4回「雅楽譜と楽家」

◆現地調査等

* 2020.11 岐阜県白鳥町にて祭礼関連調査

* 2020.12 和歌山県御坊市にて祭礼道具の調査

* 2021.01 和歌山県御坊市にて祭礼道具の調査

光平有希「近代日本音楽療法に関する研究—旧帝国大学資料の調査を中心に—」

2020年度の研究課題は、報告者がこれまで行ってきた近代における東京府築鴨病院（松沢病院）での音楽療法実践の研究成果を踏まえ、同時代に行われた他精神病院での実践内容の調査と具体的な実践形態や内容の解明を行うことであった。

明治後期～昭和戦前期は、他領域に先駆け精神医療の一環として音楽を用いる「音楽療法」が日本で体系的に実践され始めた時期に該当する。その時期の音楽療法実践で中心的役割を果たしたのは、東京帝国大学

を始めとする日本国内の旧帝国大学附属精神病院、あるいは大学附属病院内の精神医学講座であった。当時の音楽療法実践内容は、病院年報や音楽療法実践記録書に記載され、各大学の後身施設を中心に現存している。しかしながら、これまでそれらの史料が研究の対象になることはなく、それ故、近代日本精神医療における東西音楽療法の全体像が明らかにされることはなかった。

今年度は、報告者がこれまで個別的に研究を行ってきた東京帝国大学附属精神病院（東京府巣鴨病院）に加え、京都帝国大学ならびに大阪帝国大学の音楽療法関連一次史料をも付加させ、網羅的に調査を行うことにより、日本の近代精神医療における音楽療法全体の独自性や共通する思想的背景を考察した。

◆関連する論文・刊行物

- * 2020.10.10 光平有希「明治の国楽創成と音楽効用論—伊沢修二・神津仙三郎の身体観をめぐって—」『「明治」という遺産』ミネルヴァ書房、214-230 頁。
- * 2021.1.22 松田清、フレデリック・クレインス、川勝美早子、光平有希『「明石博高と島津源蔵」企画展図録』国際日本文化研究センター（制作：臨川書店）、1-135 頁。

◆関連する口頭発表

- * 2021.2.12 光平有希“日本音楽療法にみる御詠歌” 智山教化センター・オンライン研究会、真言宗智山派総本山智積院

◆記事

- * 2020.5.20. 光平有希「「音楽とは何か」に音楽療法史から迫る」『YAMAHA オンラインマガジン Inspired』《前後編／日本語・英語》
- * 2021.1.22. 光平有希「医療文化史 宗田文庫が伝え」『京都新聞朝刊』13 面

◆講義・講座等

- * 2020.4-2021.3 日本伝統音楽演習 f I・II・III・IV
- * 2021.2.18 令和2年度 後期 第6回 Online 伝音セミナー「治療と日常のあいだに響く音：「慰楽」を聴く」

◆資料調査

- * 京都大学附属図書館、京都大学医学図書館、京都市立歴史資料館、大阪大学附属生命科学図書館、東京大学医学図書館での現地調査。

◆科研費

- * 2017.4-2021.3〔研究分担者〕「20 世紀日本の長期療養型疾患の歴史—ハンセン病・精神疾患・結核の比較統合的検討 日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究（A）」（研究代表者：鈴木晃仁）

遠藤 美奈「日系社会における仏教音楽（讃仏歌）の伝播と実践に関する研究」

本年度は、日系移民社会の中心にあった日系仏教寺院の日曜礼拝（サンデーサービス）などで歌われてきた讃仏歌が宗派を超えて広がりを見せてきた実態とその内実を明らかにすることを目的に行なった。本課題は基盤研究（C）「越境する日本の仏教音楽 宗教・文化・精神のグローバル化」（研究代表 GILLAN Matthew : 19K00160）の研究分担によるものである。

まず宗派を超えた讃仏歌の活用実態を整理するために、移民数とその活動が活発なアメリカ本土とハワイに着目した。それら地域で刊行された戦前の日系新聞記事から法要や法会、行事に活用された讃仏歌を洗い出し、そこで用いられた曲名を可能な限り抽出しリスト化して分析を行なった。管見する限り、嚆矢と見られる記事は 1919 年 5 月 2 日「西國感冒死亡者追悼会」（『新世界』）のもので、戦前のものだけでも記事数は 1,000 以上に及び、多様な場面で用いられていたことがわかった。基本的には、日本語と英語それぞれの讃仏歌が用いられたが、とりわけ英語の讃仏歌の着手と整理はハワイの浄土真宗本願寺派（以下、本派本願寺と呼ぶ）が早い。本派本願寺では、開かれた宗教のイメージの創出が社会的に求められた時期と重なり、英語による典礼を組み立て「Vade Mecum」として讃仏歌の歌詞を 100 以上も作成し準備を行っている。

一方、日本語の讃仏歌は、日本国内で讃仏歌がキリスト教のそれに倣った「仏教聖歌」「仏教讃歌」と名称を展開していくのと同様に、アメリカ（ハワイ含）でも 1920 年代前半を中心に「仏教」の前置きなく「聖歌」や「ヒ（シ）ム」（= hymn）として親しまれていたことがわかった。さらに「聖歌」としての性格は、歌への番号付けにも見られ、宗派ごとに異なる番

号が割り振られて活用されていた。この番号は 1960 年代までに発刊された曹洞宗、本派本願寺の讃仏歌集まで用いられていたことを確認することができる。

次にその実態については、アメリカ本土では告別式などの葬送で讃仏歌を用いる事例が顕著で、次いで盆行事、花祭りで愛唱されていた。アメリカ本土では死者と向き合う節目で用いられた一方、ハワイでは花祭りや稚児行列など華やかな場での使用が目立つ。特に盆踊りが盛んだったハワイでは讃仏歌が歌われた記事はほとんど見当たらない。ハワイ諸島のなかには、1 つの宗派が 1 つの寺院を建立していたので、連合体を組成して活動を行っていた。この時に宗派を超えた共同体で歌われていたのが英語及び日本語の讃仏歌だった。讃仏歌が日系仏教徒であることの連帯感を醸成する役割を担えた背景には、各宗派の「教義」と絶妙な関係性を保った内容の歌詞に特徴があると考えられ、さらなる考察を進めたい。

最後に、海外では讃仏歌集の作成は、現存する讃仏歌集から戦後と推察してきたが、1937 年に本派本願寺、1939 年に浄土宗がそれぞれ改訂作業に取り掛かっていたことが新たにわかった。これら楽譜を入手することは極めて困難だが、海外で展開した讃仏歌の展開を日本の仏教音楽の歴史とどのように結びつけることができるのか、その独自性を浮かび上がらせ、研究をまとめていきたい。

◆関連する執筆

- * 2020 年 9 月 曲目解説「メロディーの宝宝箱《出会い》」『めぐみ』251 号、26-27 頁。
- * 2021 年 2 月 曲目解説「メロディーの宝宝箱《聖夜》」『めぐみ』253 号、26-27 頁。

◆関連する口頭発表

- * 2020 年 11 月「海外日系移民と讃仏歌の越境とその展開—初期の日系移民に注目して—」（共同発表：宗教共同体の音楽—近代日本の仏教界を例に—）、東京音楽大学（オンライン開催）

大西秀紀「近代日本音楽の音声資料に関する研究」

令和元年度の「伝音セミナー 日本の希少音楽資源にふれる」において、報告者は第11回「京都のうた（その6）聴く都をどり」を令和2年3月5日に担当の予定だったが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため今年度に延期となった。しかしその後もコロナ禍の状況は改善せず、結果的に実現できなかったのは残念であった。

研究面では、科研費助成研究「ニッソー、ナショナル、日蓄オリエン各社のディスコグラフィの作成」を進めた。またこれは研究ではないが、当センターがテルアビブ大学より依頼を受けた、謡曲ソノシート107冊（ソノシート423枚・623面）のデジタル化を担当した。

◆関連した執筆

- * 2020.8 「レコードと演劇」『演劇とメディアの20世紀』、近代日本演劇の記憶と文化8、森話社
- * 2020.11 「浪花節のニッソー長時間レコード」『大阪府立上方演芸資料館 令和元年度年報』、大阪府立上方演芸資料館
- * 2020.12 「古曲保存会制作レコードとその周辺」『日本伝統音楽研究17』、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター

神津武男「人形浄瑠璃文楽の近世後期上演記録データベース更新に係る追補的資料研究」

本年度の日本伝統音楽研究センターでの活動は、三件の研究費によって、次の三つの課題に取り組んだ。

第一に筆者が研究代表者として、科学研究費補助金・基盤研究（C）、研究課題名「人形浄瑠璃文楽の近世期上演記録データベース更新に係る新出資料調査と公開運用の研究」の採択を得た。2022年度までを期間とする。江戸時代・近世期の「人形浄瑠璃文楽」（義太夫節成立以後の人形芝居）の、真に科学的な通史の完成を目指して、資料整備を進めている。筆者は

「浄瑠璃本」（通し本。演劇台本・脚本に相当）、「番付」（ポスター・チラシに相当）の二種の史料について、日本国内および海外で悉皆調査を展開してきた。近年新たに所在を把握した未調査機関を中心に実地踏査して、「浄瑠璃本」「番付」各データベースの充実と精度の向上を目指す。新型コロナウイルス感染症「COVID-19」の流行のため計画の大幅な変更を余儀なくされたが、本年度には神戸女子大学古典芸能研究センターの御理解を得て、「四世竹本相生太夫旧蔵資料」、「志水文庫」（信多純一氏旧蔵）の資料調査を集め、集中的に取り組むことが出来た。記して感謝申し上げます。

第二に筆者が研究分担者として参画するところの、科研費・基盤研究（B）、研究課題名「新出コレクション「西村公一文庫」の目録作成と江戸時代の日本伝統音楽の資料学的研究」（研究代表者は竹内有一氏）が採択された。2023年度までを期間とする。当センターへ寄託いただくに至る経緯については昨年度の筆者の彙報に詳述したところであるが、「西村公一文庫」は、西村公一氏（大阪府豊中市）が収集した日本伝統音楽に関する新出コレクションである。事前の調査では同文庫は四千点を超えると見積もられ、京都・大阪を中心とする文化圏における日本伝統音楽の資料群としては、随一の点数を誇るコレクションである。当該研究課題は、その目録化を第一歩として同文庫を学界へ紹介し、同文庫の全貌を総合的に分析し、日本伝統音楽の資料学的研究に資することを目指す。筆者は浄瑠璃本の整理を担当する。

第三に当センターの共同研究「下京・大学から発信する日本音楽研究」（研究代表者は竹内有一氏）の、課題3「日本伝統音楽に関する江戸期史料の基礎的研究」へ、共同研究者として参加した。各流各派に行われた詞章本はそれぞれ独自の書型・体裁を示すが、書物として観察する際の要点について考えた。たとえば複数の曲目を一冊にした本があったとき、元来一冊として出たものを後人がまとめたものか／当初から書店がまとめて作ったか、どちらと考えるに依り、判断の根拠をどこに求めるべきかといった点についてを、竹内氏所蔵本などを具体例にして話し合い、共通の認識を深めることが出来た。

浄瑠璃本所在調査・書誌研究の成果として、文楽・義太夫節の現行曲『日蓮聖人御法海』三段目切「勘作住家の段」について、作者並木宗輔の追善興行として初演された成立と、初代豊竹麓太夫の改訂を経て現行曲として再生したことを(1)の論文にまとめた。加えて劇書『忠臣蔵岡目評判』に載る並木宗輔と二代竹田出雲の肖像画を、取り違えて記載したものであることを考証した。また(2)の論文では、浮世草子『当世芝居気質』の酒本砂太夫の風説は、初代竹本綱太夫の伝記資料として積極的に利用できることを考証して、また新出六行本『宵庚申』「在所の段」に基づいて、初代綱太夫の添削の具体的な方法を明らかにした。

◆関連する執筆

- * (1)『日蓮聖人御法海』三段目切「勘作住家の段」の成立と伝来について ―作者・並木宗輔の追善興行としての初演と、初代豊竹麓太夫の改訂本文による再生― 附リ・並木宗輔浄瑠璃本著作年譜(『早稲田大学高等研究所紀要』第13号、早稲田大学高等研究所、2021年3月所収)。
https://www.waseda.jp/inst/wias/assets/uploads/2021/03/RB013_194-141.pdf
- * (2)「初代竹本綱太夫の添削活動と伝記に関する覚書 ―人形浄瑠璃文楽の歴史研究の難しさ―」(『歴史の里』第24号、松茂町歴史民俗資料館・人形浄瑠璃芝居資料館、2021年3月所収)。

高橋葉子「芸を伝えることば―伝書のことばを読み解く」

1、プロジェクト研究「音曲技法書(伝書)の総合的研究」(代表者藤田隆則)

本プロジェクトでは、謡伝書『うたひ鏡』(寛文2年刊)の読解を通じて、江戸初期の音曲技法の研究を行っている。筆者は主に謡におけるリズムと拍節の関係を述べた項目に関し、「程」と「拍子」、および謡の間(ま)と「拍子」の関係について本文解釈と考察を行った。該当記事では「拍子」すなわち打楽器の打点を受け、間(ま)を取って「程」(打点と打点の間)から謡いだすことが提唱されていると解釈し、このような「程」への意識と、打点を受けて間を取る謡い方が地拍子の変化を促したことを推測した。全巻の翻刻・

解説にむけて次年度以降も継続予定である。

本プロジェクトは上記以外に専門部会を設け、能「羽衣」全曲の映像・楽譜・型付の作成とウェブ化に取り組んでいる。その中間発表を兼ねた、能楽学会第32回能楽フォーラム『記譜を通じて能の面白さにせまる―〈羽衣〉全曲の映像化をテーマにして』(2020年12月、オンライン配信)において、筆者は太鼓の手組と記譜法の歴史的変遷および演奏法を概説し、ウェブ化にあたっての楽譜作成の問題点などを報告した。次年度も継続し、ウェブサイトを完成させる予定である。

2、科研費研究「謡伝書用語の体系的研究―演奏の理念と表現を中心に」(基盤研究C 課題番号20K00131)

能の音楽には、音程が不安定で音階を特定しがたい「ツヨ吟」や拍の間隔が一定しない「三地謡」などの特異な様式があるが、これらは表現を優先し精神性を重視する志向性が音楽の外的構造としての音階やリズムを変化させた結果と考えられる。本研究は、能音楽の内的構造である表現様式の形成と、それに対応する柔軟な理論構造を、伝書のことばを通して解明しようとするものである。今年度は基礎作業として音曲表現用語と用例の収集を行い、室町後期の音曲伝書の一部、および『八帖本花伝書』『音曲玉淵集』など江戸期の基本的な音曲伝書のデータ入力を行った。

また今年度の関連研究として、室町後期小鼓伝書十一種の資料研究と翻刻校訂を行い(法政大学能楽研究所拠点研究「室町中後期能楽伝書の資料集作成と室町文化の継承史・社会史に関する学際的研究」研究代表者重田みち)、成果物として『宮増小鼓伝書の資料と研究―室町文化横断研究のために』(重田みち編)を出版した。この研究過程では、室町後期における謡伝書と囃子伝書の関わりの深さを改めて認識することとなった。例えば、謡伝書「永正十八年元安伝書」(但、天文以降の仮託伝書か)に見られる、謡の句末の間延びを意味する「窓があく」の表現や、謡伝書『塵芥抄』に見られる、テンポの遅速やノリの軽重を示す「七拍子」の概念が、多少のヴァリエーションはあるものの囃子伝書にも見られること、あるいは、芸の優劣より

も演奏態度や外見を重視する志向性の共通などがそれである。次年度は謡・囃子伝書の言語表現をより総合的・歴史的に把握し、能の音楽表現の形成過程を探っていききたい。

◆関連する執筆

- * 2021.3 論文「室町末期小鼓伝書の改編と継承—鴻山文庫蔵の三種の宮増系伝書を中心に」『宮増小鼓伝書の資料と研究—室町文化横断研究のために』（重田みち編、野上記念法政大学能楽研究所、ISBN978-4-600-00698-3）
- * 2020.5 「平成の楽劇—能・狂言」（羽田昶との共同発表・執筆）『楽劇学』第27号

◆口頭発表

- * 2020.12 「太鼓の記譜と演奏について」能楽学会第32回能楽フォーラム『記譜を通じて能の面白さにせまる—（羽衣）全曲の映像化をテーマにして』

◆関連する共同研究

- * 成城大学民俗学研究所共同研究事業「浅野太左衛門家旧蔵資料の総合的研究」研究協力者（研究代表者：大谷節子）
- * 法政大学能楽研究所拠点研究「室町中後期能楽伝書の資料集作成と室町文化の継承史・社会史に関する学際的研究」研究分担者（研究代表者：重田みち）2021.3 終了
- * 法政大学能楽研究所拠点研究「能の映像にそえる記譜の研究」研究分担者（研究代表者：藤田隆則）2021.3 終了

丹羽 幸江「世阿弥・禅竹の自筆譜の解読を中心とした室町期の旋律法と能の復曲《和田酒盛》」

1、「創生期の能の音楽における歌詞の伝達に適した旋律法」の研究

現在、研究課題「創生期の能の音楽における歌詞の伝達に適した旋律法」（科学研究費基盤C、2018～2021年度予定）に取り組んでいる。14世紀後半における能楽の登場により、「語り物音楽」と呼ばれる中世芸能は劇場で演じられる芸能に変化した。それまでの座敷などの狭く限られた語りの場が一気に劇場へと広がり、狭いコミュニティ内での演奏から広い観客層へと向けた芸へと昇華したのである。表現形態の変化を具体的に支えたのが、物語の伝達を直接的になう媒体、つまり音楽である。

創生期の能の音楽は、歌詞をよりの確に多数の観客に伝える手法を確立し、新しい語り空間を開いたというのが本研究の仮説である。能楽を大成した世阿弥の

自筆譜やその周辺人物の楽譜をもとに、仏教音楽である講式や早歌といった先行芸能との比較から、それまでの語り物音楽ではなかった日本語の語句の発音や文章の自然な抑揚に即した旋律法が確立した過程を明らかにしたいと考えている。

まず、能の旋律法の由来を探るものとして、令和2年度には研究発表「《松浦》以降の世阿弥自筆譜における旋律記号の早歌からの摂取」（東洋音楽学会第71回全国大会）を行った。能の大成者、世阿弥の自筆譜9曲のうち、後期に記された3曲について、先行芸能早歌からの旋律記号の影響を探った。ふたつの点からなる記号が早歌の副主音「徴」の音位を示すユリ胡麻（音符）であろうこと、そして上と下の記号もまた、現在の謡曲譜とは異なった体系を持つものであり、早歌での上下の記号に近く、完全四度の音程を示すとともに音楽構造に対する世阿弥の認識を反映したものであることを指摘した。

令和2年度はコロナ禍により、早歌の楽譜を所蔵する図書館での閲覧ができなくなったなどの理由から資料を集めるのに困難があり、予定通りに研究が進められなかった。このため研究の方向性をアウトリーチへと向け、これまでの日本の伝統音楽の歌唱に関する研究成果を一般向けに説明する『日本音楽うた理論』（2021年5月）として出版した。平成31年から中学校での音楽科で日本の伝統音楽の歌唱の指導がはじまり、体系的かつ効率的な理論が求められている。本書は能の謡の研究成果を援用し、謡だけでなく、地歌・箏曲、長唄、声明など歌唱を旋律・リズム・音色という3つの観点からとりあげ、誰にでも歌唱のポイントを押さえることができるような説明を試みた。

2、能の復曲活動

近年、観世流梅若研能会所属の能楽師加藤眞悟氏とともに現在演じられなくなった能の復曲に取り組んでいる。本学での公開講座（令和元年）で再演された《真田》をはじめ、《伏木曾我》《虎送》（令和2年12月に再演）につづき4曲目となる《復曲 和田酒盛》の復曲の節付け面を担当し、2021年2月上演の運びとなった。4曲とも室町末期から江戸時代の謡本にもとづき、古い記譜法に従って記された節付けを読解

し、現代の記譜法に直すという作業を行った。読解作業に関しては、科学研究費基盤 C での研究課題での成果をもちいて、現在とはことなる表記方法で記された謡本の解説を行った。

◆関連する執筆

* 2021.2 著書 和田酒盛復曲検討会（加藤眞悟、丹羽幸江、伊海孝充）『復曲 和田酒盛』、檜書店。

* 2021.4 著書 『日本音楽うた理論』、カワイ出版。

◆関連する口頭発表

* 2020.11 研究発表「《松浦》以降の世阿弥自筆譜における旋律記号の早歌からの摂取」、東洋音楽学会第 71 回全国大会、オンライン開催。

* 2020.12 講演及び DVD 収録「復曲の意義と難しさ」、「新型コロナウイルス終息祈願 特別公演 復曲能『和田酒盛』プレイベント第二十二回明之會」、セルリアン能ホール。

* 2020.12 口頭発表「謡の八つ割り譜について」（代表藤田隆則、テーマ「記譜を通じて能の面白さにせまるー〈羽衣〉全曲の映像化をテーマにして」での第 2 部「第 2 部羽衣の映像にそえる記譜」のなかでの担当部分。）能楽学会、第 32 回能楽フォーラム、於京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター、オンライン開催

* 2020.12 市民大学講座「謡を楽しむ秘訣」（平塚市公民館市民大学講座「復曲能『和田酒盛』に学ぶ」の第 2 回を担当。）

* 2021.2 講演及び DVD 収録「復曲の難しさ」、「第八回湘南ひらつか能狂言 復曲能『和田酒盛』」、平塚市公民館。

平間 充子「古代の宮廷音楽に関する日中比較—内宴・菊花宴における日本の女楽を中心に—」

内教坊（ないきょうぼう）は、唐代に設置された女性演奏家のみで構成される宮廷の奏楽機関であり、それに倣い日本でも 8 世紀の前半に同名の機関が発足したとされている。本年度は、日本の内教坊が舞楽を演奏していた儀礼として知られるいわゆる内宴と菊花宴の二つに焦点を当て、儀礼の構造や特徴を分析し、政治的背景から内宴・菊花宴の持つ意義、またそこで内教坊が舞と音楽を行うことについて検証した。

10 世紀後半に成立した儀式書『西宮記』などの記述によると、文人が参加し、漢詩の作成や披講を中心的な要素とする二つの宴の儀式構造は大変似通っている一方、内宴は蔵人方が開催の主体となり、天皇の常の御殿を儀場とするなど天皇との親密性が際立ち、

とりわけ官位の低い文人にとって天皇と同じ殿上に伺候する、といった破格の待遇が見いだせる。詩を献じた者へは禄を加算するいわば文人への経済的優遇措置は、重陽節の別名で節会の一つと位置付けられ公的な性格が強い菊花宴において顕著であり、二つの儀礼は天皇から文人が優遇される構造を持っていたことがわかる。

次に、内教坊が二つの宴で演奏した楽曲《柳花苑》《蘇香合》《玉樹後庭楽》《央宮楽》《万歳楽》《催馬楽》《春鶯囀》《最凉州》《海青楽》《浹河鳥》《安楽塩》《五聖楽》《応天楽》について分析すると、全てがいわゆる唐楽に分類され、さらに『教訓抄』などにはその大部分が中国発祥の謂れを持つことが見える。当時の代表的な奏楽機関であった雅楽寮や近衛府が高麗楽やいわゆる国風歌舞をも司っていた状況に鑑みても、唐風を強く意識した演目であると言えよう。さらに、『隋書』『新唐書』『旧唐書』中の記述を分析した、岸邊成雄氏・渡辺信一郎氏は、《玉樹後庭楽》が隋・唐代ではいわゆる房中楽として「皇帝・皇太子の個人的な嗜好のもとに編成された」音楽に分類されることを指摘した。なお、その起源や『龍鳴抄』の記述から、とりわけ内宴は音楽を重視する儀礼であった可能性が高い。

このように、日本の内教坊という奏楽機関の起源、そして内宴や菊花宴で演奏されていた舞楽の双方とも、中国の皇帝のいわばプライベートな側面と密接に結びつくものであり、妓女たちが舞うそのような謂れの楽曲を儀礼の場で観て聴くことが、天皇との親密な関係を体感するに絶大な効果を持っていたと考えられる。したがって、内教坊の奏楽は、単なる娯楽や儀式的威儀を整えるものではなく、儀礼の本質を具現化する極めて重要な役割を担っていたと結論付けられる。来年度は、内教坊が奉仕する他の儀礼の分析と、9 世紀初頭という時期に女性のみで奏楽機関が発達する意義についてジェンダー視点からの考察を行いたい。

関連する執筆

* 2021.3 古瀬奈津子編著『古代日本の政治と制度—律令制・史料・儀式—』担当部分「内宴・菊花宴と内教坊の奏楽—嵯峨天皇の政策を中心に—」同成社、376・95 頁